



日本補綴歯科学会誌

15巻
補綴歯科臨床研鑽会
特別号
令和5年11月

公益社団法人日本補綴歯科学会

第8回 補綴歯科臨床研鑽会「プロソ'23」プログラム・抄録集

令和5年11月5日(日)

Program and Abstracts

Annual Scientific Meeting of Japan Prosthodontic

November 5, 2023

Annals of Japan Prosthodontic Society

November 2023

Vol.15

日補綴会誌

Ann Jpn Prosthodont Soc

PRINT ISSN 1883-4426
ONLINE ISSN 1883-6860
URL: <http://www.hotetsu.com/>

大会長: 近藤尚知 (愛知学院大学歯学部冠橋義歯・口腔インプラント学講座)

実行委員長: 阿部俊之 (愛知学院大学歯学部冠橋義歯・口腔インプラント学講座)

大会事務局: 愛知学院大学歯学部冠橋義歯・口腔インプラント学講座

〒464-8651 愛知県名古屋市千種区末盛通り 2-11

運営事務局: 株式会社コムラ

〒501-2517 岐阜県岐阜市三輪ぷりんとぴあ 3

目次

大会長挨拶	2
理事長挨拶	3
参加者の皆様へ	4
座長・講演者の皆様へ	6
会場アクセス	7
会場案内	8
プログラム	9
抄録	11

大会長挨拶

第8回補綴歯科臨床研鑽会「プロソ'23」

大会長 近藤 尚知

愛知学院大学歯学部 冠橋義歯・口腔インプラント学講座

2023年11月5日（日）、愛知県名古屋市にごぞいます「愛知学院大学歯学部 未盛キャンパス 教育研究棟」におきまして公益社団法人 日本補綴歯科学会 プロソ'23を開催させていただくことになりました。

今回のメインテーマは「若手歯科医師に伝えたい知識、技術、感性」、サブテーマとして「最新のデジタルデバイスの活用と知っておくべき不変の補綴診断ならびに治療技術」としました。

歯科補綴学の現場は、補綴のみならず、技工、矯正、外科など幅広い分野に拡大を続けており、次々と新しい製品や技術が創出されています。これに伴い、補綴歯科臨床研鑽会（プロソ'23）においては、歯科医師、歯科技工士、関連企業など多くの職種の方々が参加され、アクティブに討論が行われてきました。

今回のプロソ'23では、学術大会とは異なり臨床技術に関わる教育講演を中軸として、ランチョンセミナーや企業展示等も企画し、未来を担う歯科医師と現在活躍している補綴歯科専門医にとって、さらには関連企業の皆様にとりましても有意義な大会となるようスタッフ一同、鋭意準備を進めているところでございます。

会員の皆様と名古屋の地で活発な討論ができることを楽しみにしております。

末筆でございますが、会員をはじめ関係各位の益々のご繁栄を心より祈念申し上げます。

理事長挨拶

プロソ'23 は補綴臨床のサミットを名古屋で提供します

(公社) 日本補綴歯科学会

理事長 窪木 拓男

日本補綴歯科学会は、若手歯科医師の知識、技術、感性を磨く場を、プロソ'23 として名古屋で提供します。大会長は、本年4月に愛知学院大学歯学部冠橋義歯・口腔インプラント学講座教授に就任された近藤尚知教授です。本臨床研鑽会のテーマは、「若手歯科医師に伝えたい知識、技術、感性」です。近藤教授の心意気がしっかりと感じられるプログラムになっております。すなわち、本学会のステイクホルダーである若者たちの希望を叶えるカッティングエッジの臨床を学べる機会を提供しており、このプロソがこれまで担ってきたミッションを具現化しているとも言えます。もちろん、若手ばかりが対象ではなく、多くの日本補綴歯科学会の会員にも本当に魅力的な内容となっています。このミッションを完遂するために、本臨床研鑽会は、日本臨床歯科学会、日本顎咬合学会と日本補綴歯科学会の共催となっており、当代の有名臨床家が名古屋に集結しております。めったに集まることのない先生方にこの様に集まって頂いたことは本当に有り難いことだと思います。最初のシンポジウム1では、口腔インプラント治療におけるデジタル技術の応用の最先端が垣間見られると思います。スペシャルセッション1では、日本臨床歯科学会の山崎長郎理事長と日本補綴歯科学会の馬場一美前理事長による、歯科界の未来を見据えた立場から若者へのエールが聞けるものと思います。また、シンポジウム2では、補綴治療における大きな進歩と言えるソフトティッシュマネジメントを臨床エビデンスに則って教えて頂きます。最後にスペシャルセッション2として、蒔田真人先生と小宮山彌太郎先生による補綴の未来を託す「補綴装置の長期安定性獲得のための要件」として、地に足のついた予知性に富む歯科臨床の醍醐味を教えて頂きます。どの講演も、聞き逃すことができないすばらしいものになりそうです。本会を準備して頂いた近藤大会長や阿部俊之実行委員長、澤瀬学術委員長をはじめ、全ての関与者の方々に御礼を申し上げます。

参加者の皆様へ

1. 参加登録について

- ・本研修会は事前登録制となっております。
- ・現地での当日受付はございませんので、ご注意ください。

<登録期限>

- ・2023年9月15日（金）～10月16日（月）24：00まで
- ・上記の期限までに登録・支払い手続きを完了してください。
- ・お支払い後の返金は出来ませんので、ご注意ください。

<注意事項>

- ・プログラム・抄録集について
HPにて公開し、会場にて配布します。
- ・参加章・領収書について
当日、受付にてお渡しいたします。

2. 参加費について

参加区分	参加費
日本補綴歯科学会会員	5,000円（不課税）
非会員	8,000円（不課税）
日本補綴歯科学会 登録歯科技工士	無料

※登録歯科技工士は、日本補綴歯科学会へ登録料2,000円（1年間有効・4月から翌年3月まで）を支払うことで、本研鑽会に参加できます。

詳細は「登録歯科技工士申請案内

(https://www.hotetsu.com/c_1828.html)」をご確認ください。

3. 学会当日のご案内

■会場受付：1F ロビー

11月5日（日）8：30～15：00

■単位登録

日本補綴歯科学会会員証をご持参ください

シンポジウム1スペシャル・セッション1を通して2単位，シンポジウム2スペシャル・セッション2を通して2単位の取得が可能です。

4. アンケートについて

・午前と午後の部でアンケートにご回答ください。アンケートは当日会場にてスライドに映します。

5. その他

1) ランチョンセミナー整理券を下記の要領で会場配布致します。

配布日時：11月5日（日）8：30～12：00

配布場所：1F ロビー

整理券はなくなり次第，配布を終了します。なお，聴講のみの場合には整理券は不要です。

セミナー時の飲食時は感染対策の都合上，黙食にてお願いします。

2) クロークの開設は下記の時間ご利用いただけます。

受付日時：11月5日（日）8：30～17：20

受付場所：1F ロビー

座長・講演者の皆様へ

■座長の方へ

会場にご来場の際、総合受付へお立ち寄りください。関係者用のネームプレートをお渡しします。ご自身の担当セッション開始 15 分前までに、会場内右手前方の「次座長席」へご着席ください。

■発表者の方へ

データの受付

会場にご来場の際、総合受付へお立ち寄りください。関係者用のネームプレートをお渡しします。講演開始の 30 分前までに必ず「PC 受付」にて受付をお済ませください。

PC 受付

場 所：会場内

受付日時：11 月 5 日（日）8：30～15：00

発表に関するご案内

- 1) PC を持ち込まない先生は発表データを保存した USB メモリをご持参ください。
- 2) ファイルは、PowerPoint 2019、365 のバージョンで作成してください。
文字化けやレイアウトのずれを防止するために、下記フォントを推奨いたします。
推奨フォント：Windows 版 MS 明朝／MS ゴシック／Times New Roman／Century
- 3) 解像度を HD（16：9 の比率）にあわせてレイアウトの確認をしてください。
※従来の XGA1024 × 768（4：3 の比率）の解像度も投影は可能です。
- 4) 保存時のデータファイル名は「セッション名_演者氏名」としてください。
- 5) Macintosh をご使用の場合は、必ずご自身の PC 本体をお持ち込みください。また専用の交換コネクタおよび、AC アダプターを必ずご持参ください。
- 6) 必ず事前ウイルスチェックを必ず行ってください。
- 7) 発表は、舞台上にセットされておりますモニター、キーボード、マウスを使用し、発表者ご自身で操作してください。
- 8) 発表時間の警告：講演終了 1 分前に黄ランプ、講演終了時には赤ランプでお知らせします。
- 9) お預かりした発表データは研鑽会終了後、運営事務局が責任を持って消去いたします。

会場アクセス

会場：愛知学院大学歯学部 末盛キャンパス教育研究棟

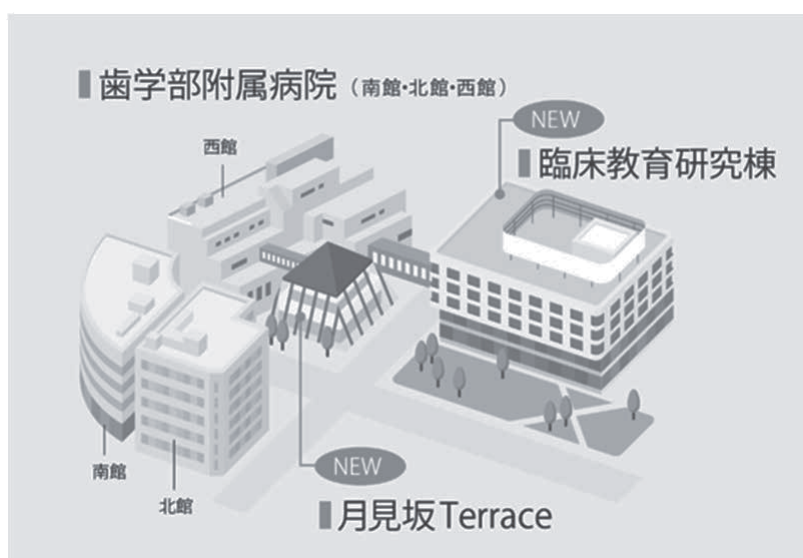
〒464-8651 名古屋市千種区末盛通 2-11

TEL：052-759-2111（代）

交通案内

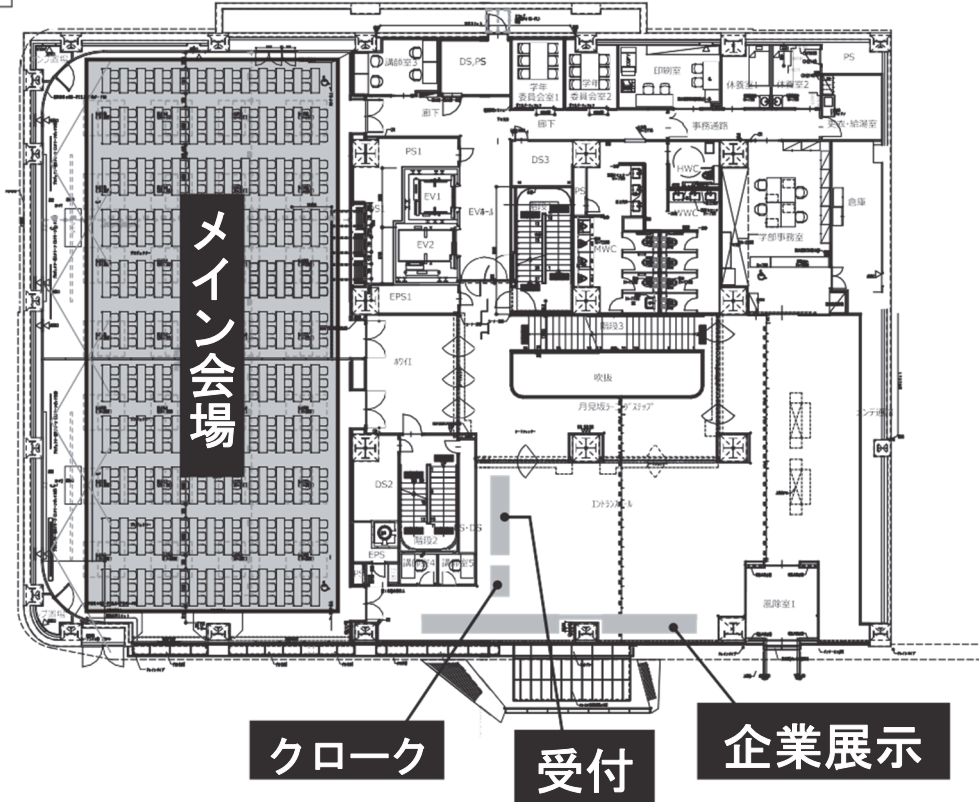
<交通機関>

・名古屋駅より地下鉄東山線 覚王山駅下車 徒歩約2分

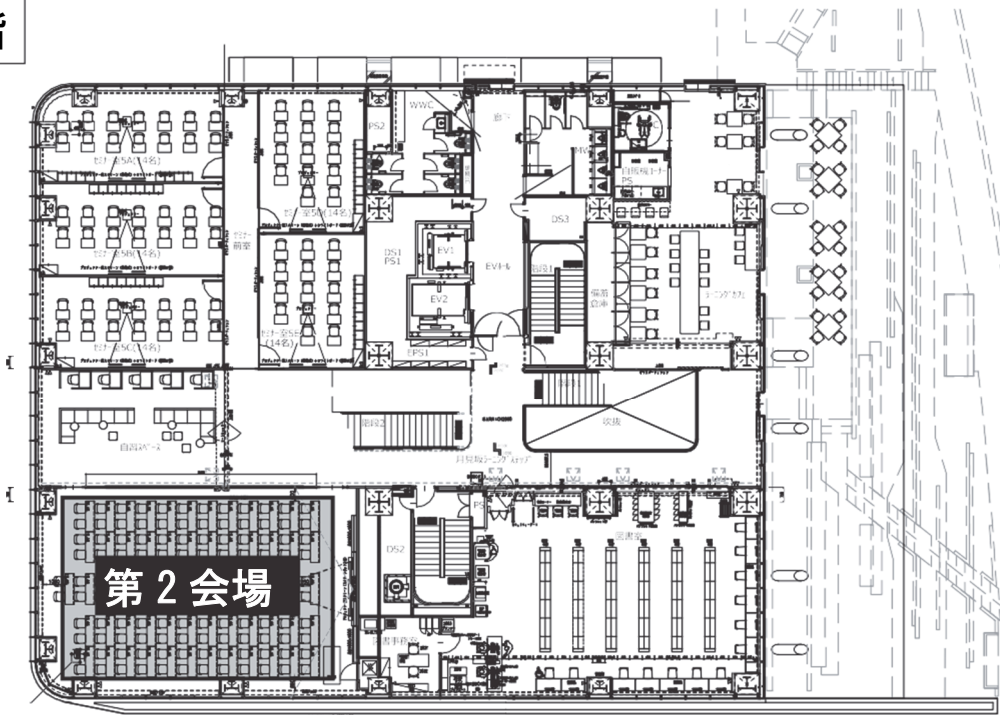


会場案内

1 階



2 階



プログラム

メインテーマ：「若手歯科医師に伝えたい知識，技術，感性」

サブテーマ：最新のデジタルデバイスの活用と知っておくべき不変の補綴診断ならびに治療技術

会場：愛知学院大学歯学部 末盛キャンパス教育研究棟

9：00～9：05

【開会式】

9：10～10：50

【シンポジウム1】

「補綴主導型インプラント治療のDX
—デジタルの眼で診断技術を可視化する—」

座長：鮎川 保則（日本補綴歯科学会）

榊原 亨（日本臨床歯科学会）

講師：千葉 豊和（日本臨床歯科学会）

墨 尚（日本補綴歯科学会）

新藤 有道（日本臨床歯科学会）

10：50～11：00

休憩

11：00～12：30

【スペシャル・セッション1】期待のホープたちに向けて

「審美と機能の融合-Digital Device をいかに活用するか」

座長：澤瀬 隆（日本補綴歯科学会）

土屋 賢司（日本臨床歯科学会）

講師：山崎 長郎（日本臨床歯科学会）

馬場 一美（日本補綴歯科学会）

12：30～12：40

休憩

12 : 40～13 : 30

【ランチョンセミナー1】

BLXインプラントと前歯審美エリアにおける Sakura デ
ィスクを使用したジルコニア補綴の優位性

講師：北原 信也（日本臨床歯科学会）

【ランチョンセミナー2】

新しい表面性状「Xeal & TiUltra」と
「On1 アバットメント」の概要と臨床での有用性（仮）

講師：榊原 享（日本臨床歯科学会）

13 : 30～13 : 40

休憩

13 : 40～15 : 10

【シンポジウム2】

「補綴医が修得すべきソフトティッシュマネージメント」

座長：黒岩 昭弘（日本補綴歯科学会）

中川 昌樹（日本臨床歯科学会）

講師：小田 師巳（日本補綴歯科学会）

林 揚春（日本顎咬合学会）

辰巳 順一（日本顎咬合学会）

15 : 10～15 : 20

休憩

15 : 20～16 : 50

【スペシャル・セッション2】補綴の未来を託す

「補綴装置の長期安定性獲得のための要件」

座長：窪木 拓男（日本補綴歯科学会）

橋本 和佳（日本補綴歯科学会）

講師：蒔田 真人（日本補綴歯科学会）

小宮山 彌太郎（日本補綴歯科学会）

16 : 50～17 : 00

【閉会式】

トリートメントワークフローの変遷 Transition of Treatment Work flow

医療法人 豊翔会 南2条千葉歯科クリニック

千葉 豊和

ここ数年来、日常の歯科臨床においてデジタルデータを活用した臨床術式は日々進歩の一途をたどり各種ソフトウェアの開発とともに、より実用性が高く各々の場面で応用されてきている。演者は2014年、まだ日本では未認可であった3Shape社の口腔内スキャナーを韓国より導入し日常臨床への応用を開始した。当初の使用目的としては、国外で発表されていた「3Shape Implant Studio」というソフトウェアを活用して口腔内スキャンデータとCBCTデータのマッチングを行いその画像上でのインプラント埋入ポジションのプランニング、およびその位置を再現するためのサージカルガイドを3Dプリンターによって再現するとともに最終上部構造までもこの段階のデジタルデータで作製するというものであった。その後、口腔内スキャナーの活用は、天然歯上部構造作製における精度確認を行った上での使用、診察診断、患者説明用ツールとしてのソフトウェアが開発されとことによるコミュニケーションツールとしての応用、さらには治療過程でのプロビジョナルレストレーションのスキャンデータデータを最終上部構造にコピーするなど様々な状況において試行錯誤的に臨床に取り入れてきている。また、最近では顔貌の3DフェイススキャンとCBCTデータを同時に撮影しそのデータに口腔内スキャンデータをマッチングさせることによりインプラントのプランニング、ガイドの作製のみならず補綴治療における上部構造の作製などをオールインワンで作製可能なソフトウェアも登場し活用を開始した。このような新しいトリートメントワークフローは臨床的精度が確約されていない部分があることから現時点では検証に時間を有してしまうことも事実である。しかしながらその上で確立されたデジタルによるワークフローは我々が今まで行ってきたアナログのワークフローと比較しても飛躍的に有効な手段となり得ることも事実であり、今後の臨床手順を根底から変えていくであろう。そこで今回演者は日々変遷し、今後も変わっていくであろうトリートメントワークフローについて現時点で考えられる治療手順、歯科技工士との連携について解説を加えたいと思う。

本講演に利益相反はない。

アバットメント～粘膜貫通部を再考する～

墨歯科医院

墨 尚

歯科におけるデジタル化が急速に進む現在、もちろんインプラント関連技術においてはその最先端にいるといっても過言ではない。CTによる術前診断・シミュレーションに始まり、CAD/CAMを応用した補綴装置を装着する。数年前まではアナログで考えていた全てをデジタルで完結するこんな日が来るとは思いもよらなかった。シミュレーションソフトを用いた設計はトップダウントリートメントには必須のものとなったが、クラウン位置からインプラントの設置位置を確定するが、果たしてそれが真のトップダウントリートメントといえるだろうか。否、骨、クラウン、フィクスチャーetc.と、インプラントを取り巻くものがデジタル化される中、クラウン・フィクスチャーをつなぐアバットメントだけがアナログ時代のまま取り残されていた。CAD/CAMアバットメントがあるという意見にはこう答えたい。それは、テクニシャンがワックスアップしたものをスキャンしてデジタル化したに過ぎない、と。その設計・形態は熟練の技に委ねられているのが現状である。そこへきて近年、かねてより期待されていたデジタル・ソリューションの進歩は目覚ましいものがある。診断用ソフト上で上部構造の位置決め・インプラントの位置を決定したデータをアバットメント製作ソフト上に移し設計されるその患者固有の形態アバットメントは、オフィスへ届いたとたん、今まで我々が経験したことのない程の違いを見せつける。設計と寸分の狂いのない形態、テクニシャンによる形態修正・研磨を必要としない完成品としての研磨面、また、インターナルコネクション・インプラントへのパーフェクトなフィット。完全にデータ上で作成されるからこそ、他のデジタルアイテムとの共有が可能となり、真の意味でのトップダウントリートメントが可能になる。今回はデンタル・インプラントがデンタル・インプラントたる所以を粘膜貫通部で大きな役割を果たすアバットメントから再考してみたいと思う。

【略歴および所属学会】

墨 尚 DDS PhD
墨歯科医院

1997年 歯科医免許を取得
2000年 愛知学院大学非常勤講師
2010年 墨歯科医院を設立
2013 A0 ベストプレゼンテーションアワード
2015 FDI FDI World Dental Conference 招待講演者

『エスティックゾーンにおける手術前診断を考える』

岩本町デンタルクリニック

新藤 有道

欠損補綴の目的は“失った組織を失った分だけ復元し、失った諸機能を回復すること”である。歯牙を失うことにより、それを支える組織（歯肉・歯槽骨）も失われ、またそれらが担っていた機能も失われる。特に前歯部領域においては解剖学的な理由から組織の喪失が著しく、前歯部領域の機能として最も重要な審美性が損なわれる結果になりがちである。

欠損補綴のオプションである全部床義歯や部分床義歯では、歯牙を人工歯で、歯肉や歯槽骨は義歯床で補うが、特に前歯部領域の歯の欠損補綴では固定性の修復法であるブリッジやインプラントが選択される傾向にあり、顎堤の喪失部分には主に硬・軟組織の外科的な造成処置が施される。

しかし要抜去歯の状況（抜歯に至った原因や、当該歯・隣接歯・対合歯の位置異状）によっては、後の欠損部顎堤の吸収の度合いには違いがでてくるため、抜歯の仕方や時期などの埋入前処置や、埋入術式の考慮が必用になってくる。

また審美性を得るためには、上部構造の歯冠形態だけでなく軟組織の形態にも、残存歯や口唇・顔貌との調和が求められる。その際、軟組織の形態を作るには周囲組織のボリュームの獲得も重要だが、上部構造の軟組織内の形態にも工夫が必要である。

欠損補綴には様々な状況を呈した症例に応じた適切な対応を適切な手順で施行することが重要です。今回の発表では前歯部領域の少数歯欠損をインプラント修復で対応した数症例提示させていただき私なりの見解を述べさせていただきたいと思います。

【略歴および所属学会】

1998年 日本大学松戸歯学部卒

2004年 岩本町デンタルクリニック開設

日本臨床歯科医学会東京支部理事

スタディーグループ赤坂会 理事

O. S. I. Study Club 会長

Osseointegration Study Club of Japan active member

「修復治療の現在と未来形とは」

原宿デンタルオフィス

山崎 長郎

現代の歯科修復治療には、マテリアルの革新・開発により大きな変化がもたらされている。しかも、その発展と進歩の速度は、私達の予想を遙かに超えるものとなっている。

一方、患者サイドにおいても、様々な媒体・分野から情報・知識を得て、従来の修復治療より更に一歩進んだ審美性を望む声が高まりつつある。

我々歯科医は、これからの変化しつつある状況を確実に把握し、新しい世紀の新たなる審美修復治療の形を確立していかなければ、この21世紀に取り残される事になるであろう。

歯科修復治療のステップアップを目指す先生方の為、最新の審美修復治療の手法と背景が、過去の修復治療からどの様に変化してきたか、それに付随する治療計画の変更はあるのか、また、使用するマテリアルの正しい選択法・CAD/CAMの使用法などを中心に、あらゆる角度から新世紀にふさわしい修復治療を解説しようと思う。

【略歴および所属学会】

Key Issue

State of Art Esthetics 卓越した審美性の創出

Restorative Update 最新のマテリアルとその問題点

Future Design 審美の未来形

Part 1 : Basic Concept in Restorative Dentistry (修復治療の基本概念)

Part 2 : Advanced Procedure in Restorative Dentistry (修復治療の先進的手法)

(略 歴) 1970年 東京歯科大学卒業

1974年 原宿デンタルオフィス開院

デジタルワークフローによる形態と機能の最適化

昭和大学歯学部長

馬場 一美

過去4半世紀に人類が経験したデジタル技術の進化により、音楽、写真、動画、通信など様々な領域で「デジタル」は驚くべき速さで人々の日常生活に浸透してきた。歯科医療もその例外ではなく、デジタルX線撮影や口腔内スキャナーが急速に普及し、長らく歯科治療のなかで中心的役割を担ってきたレントゲンフィルムや石膏模型もその役割を終えようとしている。さらに形態データだけでなく、顎運動、咬合力、咀嚼能力、睡眠中のEMGデータなど、患者固有の生理学的データもデジタルデータとして容易に収集可能になった。

こうした歯科医療情報のデジタル化、いわゆるデジタル・デンティストリーは歯科治療の進め方、治療・技工のワークフローを根本的に変えつつある。補綴装置製作過程のデジタル化はその代表例であり、ロスワークス法による従来型のアナログ歯科技工ワークフローがCAD/CAMによるデジタル・ワークフローに取って代われ、口腔内スキャナーとモノリシック・マテリアルを用いれば、模型を使うことなく、すべての治療過程をデジタルデータのやりとりで完遂できるモデルフリー・フルデジタル・ワークフローも可能となった。

こうしたデジタル化により、時間的・空間的な制限を受けず、医療情報を保存、参照、活用が可能になったが、特に補綴歯科領域では様々な種類のデジタルデータの「統合活用」が可能になるため、口腔内スキャンデータとCTデータの統合による補綴主導型のインプラント埋入シュミレーションにとどまらず、更にフェーススキャンデータをソフトウェア上で統合し、顔面形態を考慮した補綴装置の審美性の最適化を行うことも可能になった。さらには、従来、咬合器上で行われていた下顎運動の再現をバーチャル空間上で行い、いわゆるバーチャル咬合器を用いて補綴装置の咬合面形態を機能的に最適化することも可能である。

つまり、デジタルデンティストリーは単なる医療情報のデジタル化ではなく、形態・審美と機能の最適化を行う上でも、非常に大きな役割を担っている。

講演ではデジタルデータの「統合活用」に焦点をあて、審美・形態の融合という点からデジタルデンティストリーの現状を紹介し、今後の展開について考察したい。

【略歴および所属学会】

- 1986年3月 東京医科歯科大学歯学部卒業
- 1991年3月 東京医科歯科大学大学院修了（歯学博士）
- 1993年4月 東京医科歯科大学歯学部 助手
- 1996年4月 文部省在外研究員米国 UCLA
- 2002年7月 東京医科歯科大学 講師
- 2007年10月 昭和大学 歯科補綴学講座 教授
- 2013年4月 昭和大学歯科病院 副病院長
- 2019年4月 昭和大学歯科病院 病院長
- 2023年4月 昭和大学歯学部 歯学部長
- 2021年6月～2023年6月 日本補綴歯科学会理事長

「天然歯の補綴装置周囲に対するソフトティッシュマネージメント」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
インプラント再生補綴学分野・関西支部

小田 師巳

患者が求める「軟組織を含めた審美」は高度化しており、補綴歯科治療の機能と審美の長期的な安定のためには、補綴装置だけではなく、周囲軟組織に対する配慮が求められる。軟組織が経年的に変化することは経験的にも明らかであり、特に軟組織の薄い gingival phenotype はブラッシングを含めた外傷や炎症に対する感受性が高く、歯肉退縮のリスクが高いことが知られている。また、補綴歯科治療に着目した場合、クラウン装着そのものや歯肉縁下への介入によっても歯肉退縮のリスクが高まることが報告されており、長期的に安定した周囲軟組織を得るには、軟組織の厚みを確保することがひとつの重要な要素であると考えられている。

薄い gingival phenotype を厚い gingival phenotype に改変するためには、現在のところ上皮下結合組織移植 (connective tissue graft: CTG) が最も効果的な手技とされており、CTG によって造成された軟組織ボリュームが長期的に安定しうることも多く報告されている。インプラント周囲への CTG による軟組織造成部位の組織学検討を行った我々の臨床研究 (岡山大学大学院疫学研究倫理審査委員会 承認番号倫 2100) において、CTG 群の結合組織層に弾性線維が広く観察された。弾性線維は癒痕組織の形成や維持との関連が報告されており、CTG によって造成された軟組織は組織学的には癒痕組織になっていることが、造成された軟組織ボリュームが長期的に維持されている大きな理由の1つではないかと我々は考えている。これらの知見から、抜歯により吸収したブリッジのポンティックサイトに対する歯槽堤増大術においても、CTG による軟組織造成術がそのボリューム安定性から優れていると考えられる。

そこで、本講演では、補綴前処置としての CTG を用いた“天然歯根周囲の歯肉造成術”と“ポンティックサイトにおける歯槽堤増大術”を取りあげ、臨床例を通じてその理論的背景と手技のポイントについて解説させていただく。本講演がソフトティッシュマネージメントを含めた包括的な補綴歯科治療の成功への一助になれば幸いである。

【略歴および所属学会】

- 2001年 岡山大学歯学部卒業
- 2005年 おだデンタルクリニック開業
- 2006年 医療法人小田会 理事長
- 2012年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科修了
- 2018年 岡山大学病院 診療講師
- 2021年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野 非常勤講師

インプラント埋入位置とエマージェンス プロファイルによる テッシュマネージメント

優ビル歯科医院

林 揚春

審美領域のインプラント治療においては、多くの症例においてGBRやCTGなどの外科処置が多く行われている。最近の単独インプラント治療患者の満足度分析では骨造成術が満足度の低下に大きく寄与していることが示唆され、同様に、手術時間や治癒反応などの要素にも有意差が認められた。このことは侵襲の少ない手術や治療期間を短くすることによってインプラント治療に対する好感度が向上することを意味している。

インプラント周囲の軟組織構造を最適化するためには、このような侵襲の大きい骨造成処置ではなく、予知性においてもインプラントの水平的、垂直的埋入位置と方向によって、インプラント上部構造のエマージェンスプロファイルのサブクリティカルおよびクリティカルゾーンの構築が不可欠な要素となっている。

インプラントの位置が悪いと、上部構造のエマージェンス プロファイルが影響を受けて、インプラント周囲粘膜炎や周囲炎を引き起こす促進因子として働く。インプラントの位置が良ければ、歯肉の厚み、歯肉縁高さのコントロールはプロビジョナルレストレーションのクリティカルゾーンとサブクリティカルゾーンの輪郭を追加または削除することによって可能となることが多い。

今回は、実際の審美領域インプラント症例を通して、上部構造のエマージェンス プロファイルによるテッシュマネージメントについて報告する。

【略歴および所属学会】

略歴：最終大学，大学卒業後（職歴含む）

1979年 日本大学松戸歯学部卒業

1979～1983年 国際デンタルアカデミー勤務

1983～1985年 河津歯科医院勤務

1986年 優ビル歯科医院開業

セルフケアしやすい補綴物周囲のソフトティッシュマネージメント

朝日大学歯学部口腔感染医療学講座歯周病学分野

辰巳 順一

来院患者の歯周検査をした結果、補綴物周囲により多くのPCR (plaque control record) 陽性部位を認めることがある。歯と補綴物の適合不良や歯冠形態そのものが原因となっていることもあるが、患者のセルフコントロールを困難にしている周囲軟組織形態に気づくことも多々ある。セルフプラークコントロールによる通常のブラッシングストロークで、より多くの部位のプラークが簡単に除去できる環境を形成することは、ある意味患者に優しい治療であると考え。そこで、下記のようなさまざまな主訴や理由でセルフプラークコントロールが困難となることが予測された症例に対して、その原因と対応した歯周形成手術によって改善させた症例を紹介する。

- (1) ブラッシングをすると歯肉が下がってしまいそうで怖くて磨けない。
- (2) 食後汚れが溜まりやすいが、ブラッシングするとひりひりする。
- (3) ブリッジのポンティックの部分が磨きにくい。
- (4) 矯正治療を受けたがその後部分的に歯肉が下がりうまく磨けない。

などといった主訴に対し、どのような問題点が生じているのかを考え、そのうち歯周形成手術を実施し問題点を改善したケースについて紹介する。また、このような歯周形成手術を日常臨床で行えるようにするためにはどのような臨床スキルを習得すればよいのか、そのポイントを解説したい。患者がセルフケアをしやすいという観点から、補綴物周囲のソフトティッシュマネージメントについて考えてみたい。

【略歴および所属学会】

1986年 城西歯科大学（現：明海大学歯学部）卒
 1990年 明海大学大学院 歯学研究科 修了
 1990年 明海大学歯学部助手（歯周病学講座）
 1995年 明海大学歯学部講師（歯周病学講座）
 2006年 明海大学歯学部 准教授（口腔生物再生医工学講座 歯周病学分野）
 2016年～2022年 独立行政法人 医薬品医療機器総合機構（PMDA） 専門委員
 2019年～ 朝日大学歯学部 教授（口腔感染医療学講座 歯周病学分野）
 2020年～ 明海大学客員教授
 2020年～ 朝日大学医科歯科医療センター副センター長、医療安全管理室長、生涯研修部副委員長
 現在に至る

補綴治療の成功とは —長期経過症例から学ぶ—

静岡市・敬天堂歯科医院

蒔田 真人

「補綴装置の長期安定性獲得のための要件」を「知識」「技術」「感性」に分けて考察してみる。1番目の要件は、診断法（知識）と考えている。口腔内を診る場合、欠損補綴を行う部位だけを診るのではなく、対合歯や反対側も含めた全顎的な視野で診断を行う必要がある。患者の口腔内を一単位で考えることによって歯牙欠損の原因や、今後どの様に変化していくかを推測し、それに対応する補綴設計を考えることができる。そのためには、スタディ・モデルを大型咬合器に装着し、患者の咬合状態を口腔外で診査する必要がある。スタディ・モデルの咬合器装着は、歯列不正や咬合平面の乱れ、不良補綴装置による咬合不正、咬合高径等、全顎的に患者の歯列、咬合状態を診るためにも、大切な手順と考える。

第2の要件は、治療（技術）であるが、補綴装置の長期安定性は支台歯の条件（状態）に掛かっているのので、根管治療、歯周治療、矯正治療等の補綴前処置に十分な時間を掛けて、残存歯の保存、回復を行わなければならない。補綴治療の直接的な手技として重要な支台形成、印象、咬合採得は、科学的な根拠に基づく方法を選択し行うが、演者は印象については、特に寸法精度の高い点から、レジン個歯トレー法を採用している。咬合採得については、咬合が崩壊して顎位の不安定な症例では、プロビジョナル・レストレーションで、咬合の安定を確認してから、要になる部位のプロビジョナル・レストレーションを残しセントリックを保持した状態で咬合採得を行う。

最終補綴装置の咬合に不備が生じた場合、補綴装置を取り込んだ模型を咬合器にリマウントし、口腔外での技工操作により咬合面の再構成を行う方が、口腔内での大幅な咬合調整より、質の高い結果が得られる。補綴装置は、必ず口腔内に仮着し、一定期間使用させることにより、更なる咬合のズレをチェックする必要がある。

3番目の要件は、装着された補綴装置の術後管理に対する術者の考え方（感性）であろう。治療終了後患者をリコールして、治療効果を再評価しメンテナンスを行い、予後不良の場合は、次の最良と思われる方法で責任を持ってリカバリーする。この対応で患者が期待する「長期にわたる良好な予後」を実現することができる。補綴装置のトラブルがないことを最終目標にするのではなく、リコール、メンテナンス、リカバリーを実践することで「長期にわたる信頼関係」を確立することが、補綴治療の「成功」と考えている。

【略歴および所属学会】

- 1974年 愛知学院大学歯学部卒業
- 1999年 日本補綴歯科学会東海支部総会・学術大会特別講演講師
- 2001年 日本口腔インプラント学会中部支部長
日本補綴歯科学会認定研修機関認定
- 2003年 第33回日本口腔インプラント学会総会・学術大会大会長

『インプラント療法における補綴学的観点の重要性』

ブローネマルク・オッセオインテグレーション・センター

小宮山 彌太郎

予知性に優れた修復法とされるインプラント療法に、40年以上にわたり従事してきた経験から学んだことを前途のある歯科医師にお伝えしたい。演者が教育を受けた半世紀以上前とは異なり、今日では健康への患者の意識はより高まり、それは歯科医療従事者にとっても大きな追い風と感じている。それだけに、われわれは対処療法だけに注視するのではなく、予防を含めた全身状管理にも目を向けて学ばなくてはならない。結果的には、それが歯科医療従事者に対する国民の評価が、高まる契機になるであろう。

われわれが対象としているのは、機械ではなく感情を持った人間であることから、適切なコミュニケーションの確立ができていれば、長期間にわたる良好な関係の維持は容易で、かつ学べることが多い反面、その確立が困難な場合には、互いに確執をきたして遺恨の元となり、臨床的に得られるものはない。言い換えるならば、患者と医療従事者とは同じ土俵の上で対等な場に立ち、相互理解を深めることが治療の出発点であろう。一般の患者は、歯科に関する知識が乏しいことが多い。それだけに、自分にとり好都合な方向に導く、いわゆる不適切な『医療誘導』は避けなくてはならない。

天然歯列だけではなくインプラント療法においても、長期的に優れた治療結果の維持のためには、補綴学が関与する力と細菌が大きく影響するが、インプラントではそのハードウェアについても注視しなくてはならない。近年では過去に力説されていた細心の注意を払わなくともオッセオインテグレーションが得られるために患者の希望に即し易く、加えて操作の容易さを各社が謳っている。これは確かに歯科医師にとってはありがたいことではあるが、インプラントは優れた予知性を持つといった言葉が、虚しく聞こえる状況にも遭遇し、患者の落胆に接する機会も増えている。その背景には、会社の甘言を鵜呑みにして、本来、医療従事者が矜持とすべきソフトウェアが軽んじられる傾向にある背景があるのかもしれない。科学に基づく生体の繊細さを重視したソフトウェアを遵守するならば、長期間にわたり患者から感謝されることは間違いない。

最後に一老医師からの言葉として若手歯科医師にお伝えしたい。『歯科は決して暗いものではなく、心持ちひとつで患者との長期間にわたる素晴らしい絆を楽しめる仕事である。』

【略歴および所属学会】

- 1971年 東京歯科大学 卒業
- 1976年 東京歯科大学大学院 修了 歯科補綴学専攻
- 1980年～1983年 Sweden, Göteborg 大学歯学部, 医学部客員研究員
- 1990年 東京歯科大学 辞職
- 1990年 ブローネマルク・オッセオインテグレーション・センター開設
- 1993年 東京歯科大学 客員教授
- 2006年 東京歯科大学 臨床教授
- 2013年 昭和大学歯学部 客員教授

本誌を複写される方に

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、(社)日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外は、図書館も著作権者から複写権等の行使の委託を受けている次の団体から許諾を受けて下さい。

著作物の引用・転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接本会へご連絡下さい。

〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-41 乃木坂ビル

一般社団法人 学術著作権協会

FAX : 03-3475-5619 E-mail : info@jaacc.jp

ただし、アメリカ合衆国における複写については、次に連絡して下さい。

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923, USA

Phone : 978-750-8400 Fax : 978-646-8600

日補綴会誌への投稿方法

投稿希望の方は、下記の URL をご参照のうえ、

ご不明な点は学会事務局（電話：03-6722-6090）までお問合せください。

<http://www.hotetsu.com/tl.html>

日本補綴歯科学会誌 15巻 第8回補綴歯科臨床研鑽会特別号

令和5年11月2日発行

発行者 窪木 拓男

編集 公益社団法人 日本補綴歯科学会

学会ホームページ /<https://www.hotetsu.com/>

〒105-0014 東京都港区芝2丁目29番11号

高浦ビル4階

公益社団法人 日本補綴歯科学会

電話 03 (6722) 6090